隅田の春

饗庭篁村

青空文庫

第一回

三月二十日、今日は郡司大尉が短艇遠征の行を送るに、兼ねて此壮図に随行して其景況並びに千島の模様を委しく探りて、世間に報道せんとて自ら進みて、雪浪萬重の北洋を職務の為にものともせぬ、我が朝日新聞社員横川勇次氏を送らんと、朝未明に起出て、顔洗ふ間も心せはしく車を急せて向島へと向ふ、常にはあらぬ市中の賑はひ、三々五々勇ましげに語り合ふて、其方さして歩む人は皆大尉の行を送るの人なるべし、両国橋にさしかゝりしは午前七時三十分、早や橋の北側は人垣と立つどひ、川上はるかに見やりて、翠かすむ筑波の山も、大尉が高き誉にはけおされてなど口々いふ、百本杭より石原の河岸、車の輪も廻らぬほど雑沓たり、大尉は予が友露伴氏の実兄なり、また此行中に我社員あれば、此勇ましき人の出を見ては、他人の事と思はれず、我身の誉と打忘れられて嬉しく独笑する心の中には、此群集の人々にイヤ御苦労さま抔と一々挨拶もしたかりし、これによりて推想ふも大尉が一族近親の方々はいかに、感歓極まりて涙に咽ばれしもあるべし、人を押分くるやうにして辛く車を向島までやりしが、長命寺より四五間の此方にて早や進も引もならず、他の時なればうるさき混雑やと人を厭ふ気も発るべきに、只嬉しくて堪へられず、車を下りて人の推すまゝに押されて、言問

団子の前までは行きしが、待合す社員友人の何処にあるや知られず、恙がなく産れ出しといふやうに言問の前の山を潜り出て見れば、嬉しや、此に福岡楼といふに朝日新聞社員休息所の札あり、極楽で御先祖方に御目に掛つたほど悦びて楼に上れば、社員充満ていづれも豪傑然たり、機会にあたれば気は引立ものなり、元亀天正の頃なれば一国一城の主となる手柄も難からぬが、岸に堤に真黒に立続けし人も皆な豪傑然たり、予はいよ〳〵嬉しくて堪らず、川面は水も見えぬまで、端艇其他の船並びて其が漕開き、漕ぎ廻る有様、屏風の絵に見たる屋島壇の浦の合戦にも似て勇ましゝ、大尉が大拍手大喝采の間に、舟より船と飛び渡りて、其祝意をうけらるゝは、当時の源廷尉宛然なり、予も肉動きて横川氏と共に千島に行かばやとまで狂たり、舟は大尉萬歳の歓呼のうちに錨を上げて、此帝都を去りて絶海無人の島をさして去りぬ、此の壮んなる様を目撃したる数萬の人、各〻が思ふ事〻につき、いかに興奮感起したる、こと に少壮の人の頭脳には、此日此地此有様永く描写し止まりて、後年いかなる大業を作す種子とやならん、予は集へる人を見て一種頼もしき心地も発りたり、此一行が此後の消息、社員横川氏が通信に委しければ、読みて大尉の壮行と予も共にするの感あり、其は此日より後の事にして、予は此日只一人嬉しくて、ボンヤリとなり、社員にも辞せず、ブラ〳〵と面白き空想を伴にして堤を北頭に膝栗毛を歩ませながら、見送り果てドヤ〳〵と帰る人々が大尉の年は幾つならんの、何処の出生ならんの、或は短艇の事、千島の事抔噂しあへるを耳にしては、夫は斯く彼は此と話して聞せたく鼻はうごめきぬ、予は洋杖にて足を突かれし其人にまで、此方

より笑を作りて会釈したり、予は何処とさして歩みたるにあらず、足のとまる処にて不図心付けば其処、依田学海先生が別荘なり、此にてまた別の妄想湧きおこりぬ。

第二回

おもへば四年の昔なりけり、南翠氏と共に学海先生の此の別荘をおとづれ、朝より夕まで何くれと語らひたる事ありけり、其時先生左の詩を示さる。

庚寅一月二十二日、喜篁村南翠二君見過墨水弊荘、篁村君文思敏澹、世称為西鶴再生、而余素愛曲亭才学、故前聯及之、

巨細相兼不並侵、審論始識適幽襟、鶴翁才気元天性、琴叟文章見苦心、戯謔諷人豈云浅、悲歌寓意一何深、梅花香底伝佳話、只少黄昏春月臨

まことに此時、日も麗らかに風和らかく梅の花、軒に匂しく鶯の声いと楽しげなるに、室を隔てゝ掻きならす爪音、いにしへの物語ぶみ、そのまゝの趣ありて身も心も清く覚えたり、此の帰るさ、またもとの俗骨にかへり、我も詩を作る事を知りたるならば、拙ながらも和韻と出かけて、先生を驚かしたらんものをと負じ魂、人羨み、出来ぬ事をコヂつけたがる持前の道楽発

りて、其夜は詩集など出して読みしは、我ながら止所のなき移気や、夫も其夜の夢だけにて、翌朝はまた他事に心移りて、忘れて年月を経たりしが、梅の花の咲くを見ては毎年、此日の会の雅なりしを思ひ出して、詩を作らう、詩を作らう、和韻に人を驚かしたいものと悶へしが、一心凝つては不思議の感応もあるものにて、近日突然として左の一詩を得たり、

往年同須藤南翠、訪依田学海君　上村荘、酒間、君賦一律見贈、今巳四年矣、昨雨窓無聊偶念及之、即和韻一律、録以供一笑之資云、

村荘不見一塵侵、最好清談披素襟、游戯文章猶寓意、吟嘲花月豈無心、新声北部才情婉、往事南朝感慨深、我亦多年同臭味、待君載筆屡相臨、

ナント異に出来したではムらぬか、此詩を懐中したれば、門を叩いて驚かし申さんかとは思ひしが、夢中感得の詩なれば、何時何処にても、またやらかすと云訳には行かず、コレハ〳〵よく作られたと賞揚一番、その後で新詩を一律また贈られては、再び胸に山を築く、こゝは大に考へもの、面り捧げずに遠く紙上で吹聴せば、先生髯を握りながら、フムと感心のコナシありて、此子なか〳〵話せるワエと、忽ち詩箋に龍蛇はしり、郵便箱に金玉の響ある事になるとも、我また其夜の思寝に和韻の一詩をすら〳〵と感得して、先生のみか世人を驚かすも安かるべしと、門外に躊躇してつひに入らず、道引かへて百花園へと赴きぬ、新梅屋敷百花園は梅の盛りなり、御大祭日なれば群集も其筈の事ながら、是はまた格別の賑はひ、郡司大尉の壮行をまのあたり見て、子や孫に語りて教草にせんと、送別の外の遊人も多くして、帰

さは※を此に曳きしも少からで、また一倍の賑はひはありしならん、一人志しを立て国家の為に其身をいたせば、満都の人皆な動かされて梅の花さへ余栄を得たり、人は世に響き渡るほどの善事を為したきものなり、人は世に効益を与ふる大人君子に向ひては、直接の関係はなくとも、斯く間接の感化をうくるものなれば、尊敬の意をうしなふまじきものなりなど、花は見ずして俯向ながら庭を巡るに、斯く花園を開きて、人の心を楽ます園主の功徳、わづかの茶代に換へ得らるゝものならず、此園はそもいかにして誰が開きしぞ。

第三回

此の梅屋敷は文化九年の春より菊塢が開きしなり、百花園菊塢の伝は清風廬主人、さきに国民之友に委しく出されたれば、誰人も知りたらんが、近頃一新聞に菊塢は無学なりしゆゑ、詩仏や鵬斎に詩文にてなぶり者にされたりといふ事見えたるが、元より菊塢、世才には長たれど学文はなし、詩仏鵬斎蜀山真顔千蔭春海等、当時の聞人の幇間半分なぶり者にせられしには相違なし、併し諸名家が菊塢を無祝儀で取巻同様にする間に、菊塢はまた諸名家を無謝儀にて使役せしなり、聞人といふものは何の世にても我儘で高慢で銭も遣はぬくせに、大面で悪く依怙

地で、自分ばかりが博識がるものなり、菊塢は奥州よりボツト出て、堺町の芝居茶屋和泉屋勘十郎方の飯焚となり、気転が利くより店の若衆となり、客先の番附配りにも、狂言のあらましを面白さうに話して、だん〳〵取入り、俳優表方の気にも入り、見やう聞真似に発句狂歌など口早く即興にものするに、茶屋の若者には珍しい奴と、五代目白猿に贔屓にされ、白猿の余光で抱一不白などの許へも立入るやうになり、香茶活花まで器用で間に合せ、遂に此人たちの引立にて茶道具屋とまでなり、口前一つで諸家に可愛がられ、四十年来の閲歴に聞人達の気風を呑込たれば、只で諸名家の御休息所を作り、其の御褒美には梅一本づゝ植て下されと、金と卑劣に出ざる名案、梅一本の寄附主が、和尚如何だナ抔と扶持でもして置くやうに巾を利かせて、茶の呑倒しを、コレハ先生よくこそ御来臨、幸ひ左る方より到来の銘酒、これも先生に口を切て頂くは、青州従事が好造化などゝ聞かぢりと、態と知らせて馬鹿がらせて悦ばせれば、大面先生横平たく、其面を振り廻し、菊塢は可笑い奴だ、今度の会は彼処で催してやらうと有難くない御託宣、これが諸方へ引札となり、聞人達の引付で、諸侯方まで御出になり、わづかのうちに新梅屋敷の名、江都中に知られ、夫のみならず先生々々の立こがしに、七草考の都鳥考のと人に作らせて、我名にて出版せしゆゑ、知らぬものは真の文雅の士とおもひ、訪よるさへも多ければ、忽ち諸国にも園の名を馨らせ、枝葉の栄え、それのみか、根堅き名園を斯く遺して年々の繁昌、なみ〳〵の智恵、生才学にて此の長栄不朽の計画のなるべきや、気を取りにくき聞人の気をよく取りて皆我用となしたるは、多く得がたき才物なり、

もし戦国の時にあらば、うまく英雄の心を攬りて、いかなる奇功を立たるやはかりがたし、殊に此地に一名園を加へたるは私利のみなりといふべからず、偖此の菊塢老年には学問も少しは心がけしと見え、狂歌俳句も左のみ手づゝにはあらず、我が蔵する菊塢の手紙には、梅一枝画きて其上に園の春をお分ち申すといふ意味の句あり、また曲亭馬琴が明を失してのち、鬱憂を忘るゝために己れと記臆せし雑俳を書つらねて、友におくりし中に、此菊塢の狂歌二首発句一句あり、（手紙と其書も移転まぎれに捜しても知れぬは残念）兎にも角にも一個の豪傑「山師来て何やら植ゑし隅田川」と白猿が、芭蕉の句をもじりて笑ひしは、其身が世の名利に拘はらねばなり、此日見るもの皆嬉しく、人の為る業を有難く思ひしは、朝の心の快濶なりしうつりか、其飛々の独笑み隅田の春光今日新し。（明治26年3月～4月「東京朝日新聞」）

青空文庫情報

底本：「明治の文学　第13巻　饗庭篁村」筑摩書房
　2003年（平成15年）4月25日初版第1刷発行
底本の親本：「饗庭篁村全集」春陽堂
　1928（昭和3）年8月
初出：「東京朝日新聞」
　1893（明治26）年3～4月
入力：斎藤由布子
校正：noriko saito
2008年7月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

隅田の春

饗庭篁村

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/